Y8-04

院内急変シミュレーションの実施

成田赤十字病院　MRMワーキング

○野田（のだ）　祥子（さちこ）、秋葉　明子、阿比留美也子、立石　睦子

【はじめに】当院では毎年、救急認定看護師・MRM委員が中心となり、院内急変に対する対応能力の向上を目的に、急変時対応シミュレーションを実施している。しかし、事務部門や委託職員などの医療職以外の部署のシミュレーション参加ができていなかった。今回、医療職以外の職員を対象に急変時対応研修会を実施し、急変時対応に対する意識が高まったのでここに報告する。
【実践内容】医療職以外の職員を対象に急変時対応に対する聞き取り調査を実施した。その結果、約80%が救急法などの受講経験がなく、急変時のシミュレーションに参加したことがなかった。しかし、救急法に対しての興味があり、機会があれば参加したいと考えていた。そこで、まず救急認定看護師の監修の元、ICLSやACLSインストラクターの資格を持ったMRM委員がBLSとAEDの使用を主とした研修会を実施した。
【結果・考察】実践後の調査で、「急変時対応のポイントが理解できた」「救急法に興味を持った」が100%、83%が急変に遭遇した際、「不安はあるがやってみる」と答えた。今回の結果から、研修により経験することで急変時対応への意識向上が図れたとともに、今後のシミュレーションへの参加意欲を引き出すことができたと考える。

Y8-05

急変時対応シミュレーションの取り組み第二報

足利赤十字病院　医療安全推進室[1)]、
循環器内科[2)]、救急科[3)]、看護部[4)]

○稲村小夜子（いなむらさよこ）[1)]、高橋　暁行[2)]、小川　理郎[3)]、長谷川雅史[4)]、
北岡　清吾[3)]、坂庭　弘晃[3)]

【はじめに】第48回日本赤十字社医学会において当院の急変時対応訓練の第一報を報告した。2012年から指導者の全員がICLSインストラクターとなり、急変に対応できる訓練システムを再構築した。シミュレーション教育ではBLSの知識と技術について一定の成果が得られたので報告する。
【方法】訓練システムはBLSを根幹とした。シミュレーションは各部署における急変時のケースを想定し、実践的なシミュレーションとした。BLS講習後の意識調査、シミュレーションにおけるBLS技術の実施者の評価と指導者の評価を行った。
【結果】BLS講習後の意識調査においてBLSに関する理解度は100%であった。また、急変に遭遇した時に蘇生できるかの質問に実施者の全員ができる、見学者も80%の人ができると回答した。シミュレーションの評価は実施者、指導者共に評価が全ての項目においてできたと評価した。
【考察】BLSの訓練を繰り返し行ったこと、指導者全員がインストラクターで内容を熟知していたことは、BLS実施者の技量に関して概ね満足のいくレベルであった。また、訓練で各部署のスタッフが急変時にどのように対応すべきか明確になり、自信を持った対応が可能となった。実際、シミュレーション後に心肺停止患者に直面する部署があった。スタッフからはシミュレーションとおりにできたと自己評価が高かった。訓練は参加者全員で急変を考える機会を持ったことで今後急変においてスムーズな対応が可能になったと考えられる。
【結語】急変の際には適切な急変対応が行なえる。

Y8-06

実践的な防災訓練を目指した取り組み

大津赤十字病院　防災担当者会

○岩崎（いわさき）　昌美（まさみ）

[はじめに]東日本大震災以降、災害に対する意識は高まっている。部署によって防災知識の差や防災訓練の方法が違う現状を踏まえ,知識の統一と実践的な防災訓練を目指した担当者会の取り組みについて報告する。
[活動目標]・机上訓練による防災意識の向上と意識の統一・他部署の防災訓練の参加見学
[活動の実際]担当者の知識の統一を図る為、資料で基礎知識を付けた後机上訓練を実施。防災訓練の全体像と役割を理解したうえで、担当者が患者役、医師・看護師役、見学者になり３部署の防災訓練の参加・見学を実施。訓練後それぞれの視点から意見交換を実施。自部署での訓練に反映実施。
[結果・考察]机上訓練を実施した事で災害時の動き方を全体的に見る事ができ役割を整理する事ができた。アンケート結果からも多くの担当者が机上訓練の必要性を理解し有効であると評価した。しかし自部署で防災訓練は実施できたが「机上訓練」を伝達出来たかの質問に関して45％の部署で実施出来ていなかった。有効性は理解できるが勤務の都合上実施するのは難しいとの意見がきかれた。机上訓練は災害時の動きの全体像を把握する上で重要であり、また客観的な視点から見る事ができるため実践的な防災訓練を実施する為にも、机上訓練は必要であると言える。また他部署の防災訓練に参加見学では、自部署の防災訓練と比較することができ、他病棟の特殊性やスタッフ間の連携の取り方など工夫している点など知る機会となった。それぞれの役割の中で客観的に訓練を見る事で問題点が明確になり他部署の防災訓練に参加した事は有効であったといえる。
[終わりに]机上訓練と他部署での防災訓練参加見学では、基本的な動きを中心に行なった。災害発生時、迅速で確実な行動を取る為にも訓練の実施は重要であるといえる。今後は病棟の特殊性を組み入れた訓練の実施に取り組んでいく必要がある。

Y8-07

指さし呼称定着への取り組み

横浜市立みなと赤十字病院　医療安全推進課

○三上久美子（みかみくみこ）

【はじめに】日々報告されるエラーの最多要因が確認不足である。職種を問わず業務遂行時の確認は不可欠である。これまで指さし呼称の有効性を説明し、推進してきたが、なかなか定着しないため、何とかしたいと考えていた。そこで、敢えて職務上は禁止されているマニキュアを活用し、短期間の指さし呼称の定着キャンペーンに取り組んだ。その結果得られた効果と今後の課題について報告する。
【概要】当院のインシデント報告の中で薬剤関連のエラーは最多項目である。ほとんどの事例に於いて、要因に確認不足があげられる。薬剤業務に限らず、あらゆる行為に確実な確認はつきものである。これまでも院内の安全に関する委員会や、個別報告時などいろいろな機会と捉えて、繰り返し確認の精度が上がる指さし呼称による確認を推進してきた。しかし、残念ながら定着しない状況であった。毎年新入職者へのオリエンテーションで指さし呼称がいかに有効かを説明しても、現場で定着していないため結局新人も実施しない。そこで、受け入れ側の準備として、3月末に指さし呼称のキャンペーンを行った。これまでの方法では、定着にはつながらなかったため、新しい方法で取り組んでみようと考えた。利き手人差し指の爪に赤いマニキュアを塗り、確認時指差しをせずにはいられないようにすることを提案したところ、看護部と薬剤部の協力を得ることができた。キャンペーン前後のインシデントレポートの報告数と、アンケート結果から得られたスタッフの認識、患者さんの反応などを含め、今回のキャンペーンの評価と今後の取り組みのヒントを得ることができたので報告する。